



養正兩談初編卷之三

東都

曲亭馬琴著

○鬼貫が傳同道

鬼貫姓いふ嶋氏依祿ハ与惣在馬。模範翁と号以模範  
 伊丹の人なり。後大坂の家一々姓を平泉と更む。小見  
 楯を維舟及宗因子學び後一家をたると鬼貫獨玄同  
 句遷不廿二終つる。元文三年八月二十七八歳命て没す。  
 伊丹黒保寺子墓あり。浪花客中或人の話に鬼貫はあ  
 ろの幼きをさうしあ。知とる和州郡山彦の足燈たどつとわ  
 その後大坂よりさうし小見の足灯たどつとわ。世をさる  
 里ぬ。今乃大坂子鬼貫道引とく。小見の療治。足  
 上りのさうし。按摩の法のさうし。





新編 源氏物語 巻之八

雲とろくろのりらなるやまの雨

これ郡山を辞し大坂へくる時の夜なりといふ庵の  
 ち一夕友人醒世子とこの翁なるが醒世子の云難波集りと  
 おどく。其角が伊丹の歳且帳なるやうなと書しをこれ  
 じ。鬼貫なるを翁とせしむる。伊丹の鬼貫と名告く諸國を遊  
 りの鬼つゝといふまじれ。伊丹の鬼貫と名告く諸國を遊  
 歴したることあり今もをりくその墨跡をみるにぞり。人の名  
 を鬼貫と稱くし今もひくく。名をよめりて程なるが鬼貫と  
 りるをいふるが。鬼貫及引も。この假鬼貫  
 浪速ありへ遠れりて。たれりやといふ。鬼貫は伊丹の  
 大坂の僅五里餘を隔れに鬼貫大坂あり。伊丹の向きて  
 廢物いまるべし。鬼貫が所居したる。と證しとてよとれあり

源氏物語 巻之八

源氏物語 寛延辛未九月撰 嵯峨姓の建氏字の孟喬寒葉集  
 と書て惟新片をよむとあり也太理又後足と録し

源氏物語 萬葉集の古風を唱へ著述す。嘗て雲をのりあり  
 難波の澤には咽唱し。種をのりあり。今も鬼貫の名をか  
 いたのりあり。一女の中をひらき外に今も鬼貫の名をか  
 朝夕の煙をいと昔の荒路をたれりて。翁と画贊のたびを  
 ながせ。その人の東西の賜をよむ。これいなり。あまを潜ぬ  
 谷中の魚の水をよむ。よむあり。長物なれば。能く大に  
 かたよ一通をよむ。一貫一賤。文をよむといふ。これいなり。れ  
 知るといふ。このあり。門前小車馬をよむ。けの雀の巢を  
 あまきれ。餅をよむ。一粒もな。今日よせぬ。ひる月夜に  
 及。なれ。あまをよむ。とて。一條をよむ。いなり。の娘  
 神なり。鼻よ本の裏のよむ。あまをよむ。いなり。人よむ。とて。



同家歌  
一貫錢

下  
一貫錢

胸中自有  
千金咏  
囊裡應無  
一貫錢

權花翁



路通

美色同話卷之三

刀扇

三

美色同話卷之三

權翁

一







追考  
予このまゝ  
先書を以て  
了るの時云  
元禄八年十  
月六日大坂  
町との屋平片  
野が坂の  
和泉屋の商  
人西屋七  
三郎の墓  
に  
三郎の墓  
とありて  
其の傍に  
ありて  
其の傍に  
ありて

長崎雨談卷之三



追考  
予このまゝ  
先書を以て  
了るの時云  
元禄八年十  
月六日大坂  
町との屋平片  
野が坂の  
和泉屋の商  
人西屋七  
三郎の墓  
に  
三郎の墓  
とありて  
其の傍に  
ありて  
其の傍に  
ありて



雕富主人

追考  
予このまゝ  
先書を以て  
了るの時云  
元禄八年十  
月六日大坂  
町との屋平片  
野が坂の  
和泉屋の商  
人西屋七  
三郎の墓  
に  
三郎の墓  
とありて  
其の傍に  
ありて  
其の傍に  
ありて

長崎雨談卷之三

三郎







心入部内

をく。あれを女葬大頭と名づく。この葬は岩戸開天地拍  
 子羅生門などいふ傳交れ舞ありとて。永祿のころ室町家よ  
 して祿ありたる舞女は笠屋其といふものあり。其ころ室町殿  
 物語よとえたり。あれ笠屋と名づくれどもあれその子孫は笠屋  
 新傳といふ傳。同春傳などいふ女あり。その寛文のころその  
 女葬ん。之傳といふ門より出たる女あり。由緒あるものあり。おれ  
 伎能を伝へ並本五瓶といふもの。之傳かといふは。天冠を  
 むく。きり。天明四年十月相長桐芝居興。免許の  
 馬橋と云んり。おれを考る。天冠傳衣。天和のころあり。あ  
 大鞍一挺あり。あれのし。女葬の遺風なり。あ  
 の寛永のころ説は。女あり。京は佐也といふもの。一  
 子の説なり。お苗を世七といふものと。お苗の死をかや。之傳

古  
 礼  
 子  
 礼  
 子  
 礼





花江

寄進の舞ヶを刻き、墨かきして山東主人小おれ彼人  
 うれを自他の生来の世をのりてあま國せ浪花古老の經小  
 梳久々の下免老実小して常花街地をふまじ。同唐の社  
 反あれを西けり。強く青樓は誘ひをわめんとて梳久が  
 母を命くこのるを笑てあろくや抄ひん俄は文あつめ  
 ち。松山よあつぐの正をつげ、梳久が工をこのむ。梳久これ  
 ち。母は洋利して花街は越人とて母の云。商人の利よ  
 ち。いつのこもあつ。廓ちたむびてい。ち。あろをア  
 ち。そのぞとよ。それ多松山の全盛たひち。そのころちやむ  
 たりと。此月花街小ゆうをかふとど彼をさふと。梳久母の命  
 をゆき。遂よその友とも小樓は覚る。友人小おのちくがまれる  
 妓をふむ人梳久一人熟女は死をあがく。笑人と。梳久母

花江雨談卷之三

八編

石

花  
 十  
 七





伊勢の風流 意紋昔好色

の教を習て松山をよぶ松山事りて一別の會話を叙ることむさく  
相あれるが如し。元旨あつたはやく發せに羞れ松久もいづらう  
そひぢがうと死後よあらしむ。そく房入るりけりハハ  
元より此方をあそぶと。あつるをさだの非くそくわしあかそく  
ろえ絲さきど此方が情あそくあひのそくわを色たりと  
これに謝せ松山うつ笑くあれをう。これに母君のいづら  
ふうれおありと。あつるのそくわを結る松久そくわ母の意を  
を感じ。且松山が情あそくをそくわく。松久は家をそくわ  
ゆるとぞん。松久が紋い扇車なるり。あや。あつる曲三味線おま  
ま亦室永のあつる瓢箪くくといふ病法師伝説を悟得し  
人を興し。或い何系もそく。或い市中を徘徊せしとあり。あつる  
おまお松久とあつるそくわんりことそく會し。他そくわんり  
載せ。

伊勢の風流 意紋昔好色

伊勢の風流 意紋昔好色 卷之二



昔男といふ冊子。へんりん  
くくが図あり。草子てあま  
の載せ。

曲三味線 卷之二

右のいふ條。おまを結せ松久  
昔のあつるのあつるし。あつるあや天  
おまお松久布子丸けのあつる帯  
草中いおのあつるがう。あつるあつる  
天目吸口あつるのあつるあつるのあつる  
足袋細緒のあつるあつる。あつるあつる  
あつるあつるのあつるあつる。あつるあつる  
あつるあつるのあつるあつる。あつるあつる

伊勢の風流 意紋昔好色

伊勢の風流 意紋昔好色







大正



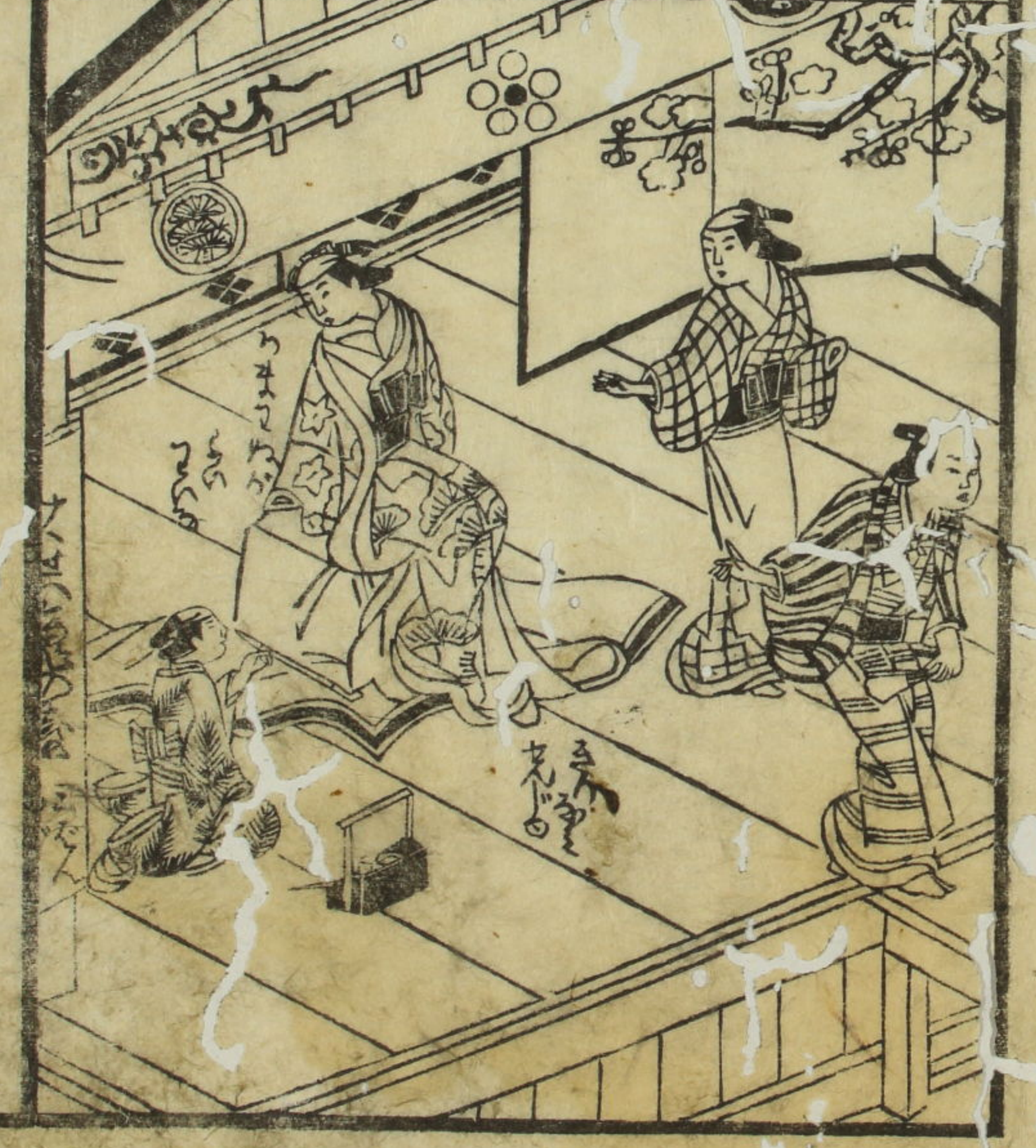
百集のむくあり  
 のとあり。左美北  
 引船女をまつま  
 と。夕方うらやま  
 るといふ。そのま大坂  
 小坂波を何ごとといふ  
 とのあり。夕方が

病中も心を癒して  
 のりぬ。この人を  
 九折町の吉田を去  
 らぬ。各々ありと  
 ぞ。是室六年二月  
 三月より夕方夕残  
 の月と夕方夜枝  
 ねををせ。着座修  
 在焉。よ坂田後十年  
 ありて。大に驚目せ  
 一とあり。そのち室  
 永六年中ぐ夕方

享保二年戊午西月



この圖西月  
 かあり。ちか  
 まりし。まて



遊東云余ふりてい若たを傍板

長生同炎卷之三

二編



浪花五人男

の和をよむせしむ十八度あり... 昔といふは夕霧の津第一の名妓... 客次などとも月ハ晴月なり... 又芳が傳を述ぐ云。摘要 元來夕霧の折屋の夕霧あり... 扇屋の夕霧ありとぞ。二代めれ夕霧の自又とて... 根を其の家あり。但扇屋の金山と折屋の夕霧を... せといふ居籠園が夕霧文章といふ也... 山と名よたらの河の全盛とおも。花岳芳春ハ... 名ありあるべしとて。予あの説を... 後津島平小波くまの墓を... 名ありとて... 又寺説ハ夕霧が墓ハ今... 名いふも... 金山と名よたらの河... 一は。是ハ夕霧の墓を... 一。さて金山といふ... と縁縁とくつげ... 浪花五人男

浪花五人男

五人男ハ元禄頼のありあり。元禄十四年六月六日の夜大坂南久宝寺町四丁目。河内を去る傍が雇人... 浪花五人男

浪花五人男







北

梅のうめ

藤枝雨後卷之三

藤枝雨後卷之三

庵の平去湯



著作堂

かきつるるるる

梅のうめ

馬屋

極下ふたふた



望全文七

かきの市を

ふたふたふたふた

あやふらふら

藤枝雨後卷之三



たるより... 面あり... 天王寺の  
塔中へ雁金文七が奉納せり。八嶋合戦の繪馬あり。一が近曾  
天王寺回祿の... 今にか... 人なり。

○近松門た島他文の自序

近松門た島... 近松門た島... 阿禪院... 一説... 予... 近松...

墨迹二幅あり。一ハ美人の画賛。一ハ辞世の詠草。予... 亦函性爺大明丸... 書とせ...

今ハ新艘... 詩文あり... 相中... 唐船... 舟...



近松

一、近松四郎、深山の奥の里にまぐりしつゝ志めんとし、そ  
深檀の權象牙の漿之筋の終ふかへり。船系よりけ  
大吉日、順風は時を待つ。のせき中道大助丸  
享保元年申の冬、まら日  
近松序之

近松が遺りたるの硯あり、後近松は二不傳ふもの硯の蓋も漆  
して、事取二危近一而義、幾勸懲の九字を志る。こころい  
燈翁傳奇、玉燈の序、昔人之作、二傳奇也、事取  
九近一而云云といふ、緒をこまら。近松小説はあろをよせり  
こはあろ、あろ、この人を突ふ、本邦の事、笠翁あり

義笠雨談初編卷之三 終

月氷奇縁

曲序主人著 繪入 全五冊

この書ハ亨徳年間孝子節婦ありて  
志の艱難をへくつひまの仇をむく  
ひて及劍鏡の奇瑞鳥獸の怪異ホを  
論トなるひるふの小説なり

義笠雨談二編 近刻

小説比翼文

曲序子著 繪入 中本全二冊

享和四 甲子年正月 良辰兌行

尾州名古屋本町七丁目

永樂屋東四郎

書坊

大坂心斎橋筋唐物町

河内屋太助

江戸通油町

葛屋重三郎用鐫



松林竹石  
 行樂圖  
 卷之二  
 松林竹石  
 行樂圖  
 卷之二



白烟

精製西藥

卷之二



